

# 雲南チベット族の牧畜業

—尼汝村タンディアオ家を事例として—

金丸良子

## 1. 問題の所在

筆者は、中華人民共和国に出かけることが比較的自由になった、1980年代より西南中国に調査に出かけた。広大な面積を誇る中国の中でも西南中国に調査地域を限定したのは、次のような理由からであった。すなわち、中国に分布・居住する少数民族<sup>1)</sup>は政府が認知しただけでも55に達するが、その中でも、とくに西南中国に多数の少数民族がモザイク状に集中して居住しているからである。

このように、筆者が長期間継続して西南中国に分布・居住する少数民族に注目し、その調査・研究に従事してきたのは、中国の民族文化を正しく理解するためには、人口の大多数を占める漢族とともに、同じく国家の一員である少数民族も研究視野に入れなければならない、と考えているからである<sup>2)</sup>。すなわち、中国国内に分布・居住する55を数える少数民族は、その一部には他の民族集団が伝承してきた伝統や文化の影響を受けているため、互いに共通した伝統や文化がみられる。しかしながら基本的には、それぞれの民族集団が固有の伝統や文化を育み、独自の生活様式 (*genre de vie*) を維持してきた。これらの少数民族にみられる独自の生活様式は、最大の人口規模を擁する漢族の生活様式にも影響を与えることになるとともに、漢族の生活様式も少数民族の生活様式の中に取り入れられた。つまり、このようにして、長い年月を通じて複合的に形成されてきたのが中国の民族文化だといえよう。

上述のような大きな特色を有する中国の民族文化ではあるが、とりわけ、筆者が強く興味・関心を有する衣・食・住の文化に代表される物質文化 (*material culture*) に関しては、そのような傾向が顕著であると推察できる。さらにそれに加えて、筆者は既に述べた如く、西南中国の中

心にフィールドサーヴェイを主体とする調査・研究に従事してきたが、フィールドサーヴェイに基づく実証的な研究は、生活の経済的な基盤でも称すべき物質文化に関する基礎的な詳細な調査を踏まえることこそが、最低の必須条件であると確信している<sup>3)</sup>。

本稿は、このような問題意識に立って、物質文化の主要な構成要素と考えられる生業形態の中でも牧畜業に焦点を合わせ、論を展開していくことにする。調査対象としては、迪慶藏族自治州香格里拉県洛吉郷尼汝村をとりあげる。尼汝村は雲南省北部に位置し、牧畜業に従事するチベット族が居住している、典型的な雲南チベット族の集落である。なお、現地調査は2007年3月上旬および9月上旬に実施した。

## 2. 雲南チベット族の特色

チベット族はチベット高原<sup>4)</sup>を中心とし、その周辺地域に集中して分布しているが、その一部は国境を越え、インド・ネパール王国・ブータン王国などにも住んでいる<sup>5)</sup>。自称はポエ・パ (phə? pa) という。「ポエの人」という意味である。「ポエ」とは7世紀初めにチベット族が建国した王国のことで、当時の漢族がその王国を吐蕃と称した。その「蕃」の字は、チベット族の自称「ポエ」に因む言葉の意識とされる<sup>6)</sup> (村松 1973 : 138)。この吐蕃という言葉は、唐からシルクロード経由で西方に伝わった。当時シルクロードに勢力を有していた突厥は、その碑文 (突厥碑文) の中で、ティビット (Tüpüt) と表現された。その後ティビットは、契丹で鉄不得、モンゴルで脱孛都惕、中世イスラム圏ではティバット (Tubbat) などとして知られた。それがヨーロッパに伝わってチベット (Tibet, あるいは Thibet) と称されることになった (江上編 1987 : 123)。

チベット族<sup>7)</sup>は、言語系統を主体とした民族区分に従えば、漢・チベット語族に所属している<sup>8)</sup>。その他中国には、オロス族やタジク族が属するインド・ヨーロッパ語族、満州族やモンゴル族などに代表されるアルタイ語族、さらには台湾に居住する高山族が所属するオーストロネシア語族、ワ族などオーストロアジア語族など、種々の語族に属する民族集団

が居住している。

そのなかでも漢・チベット語族には、所属する少数民族の数が合計 31 というように、非常に多くの民族集団がみられる。それ故、漢・チベット語族は、さらに 4 つの語群に細分されている。すなわち、この 4 つの語群とは、漢族および回族<sup>9)</sup>が属する漢語群、チベット族を筆頭に 16 の民族集団が所属する最大の語群であるチベット・ビルマ（ミャンマー）語群、ミャオ族に代表されるミャオ・ヤオ語群<sup>10)</sup>、およびチワン族やタイ族などのカム<sup>11)</sup>・タイ語群の 4 語群である。

上述のチベット・ビルマ（ミャンマー）語群の中心となる民族集団がチベット族である。チベット族が話すチベット語は、中国語（北京官話）と同様に単音節語で、声調をもつ。しかし、語順は中国語と異なり主語-客語-述語という順序にならぶ（村松 1973：136）。

チベット族の主要な分布・居住地域は、既に論じた如く、中国西部の一角を占めるチベット高原である。チベット高原の総面積は 200 万平方キロメートル以上もあり、中国最大の自然地域である。また、平均海拔高度が 4,500 メートルにも達し、世界の最高度に位置している（任主編 1982 阿部・駒井抄訳 1986：279）。それ故、高原内の気候は冷涼である。そのため、高温による水分の蒸発がきわめて少なく、短期間の夏季には山上周辺の氷河が溶け出すと、多数の沼沢や湖沼が卓越する湿地帯が広がる草原へと景観が大きく変化する（田畑他 2001：11）。この期間では一部地域では、ハダカ麦の一種であるチンクー麦や、越冬ソバなど耐寒性に富む作物が栽培される。しかし、草原の大部分は冷涼な気候のため農業に適さず、ヤク、毛が黄色を呈する黄牛とヤクとの雑種である犏牛、馬などの家畜を飼育する牧畜業が行なわれ、それが生業の中心となっている（木内編 1984：336-337）。

以上述べたような生活に従事しているチベット族が、チベット高原に集中して分布・居住しているのは、602 年にはじめてチベット地方を統一した吐蕃王国が 9 世紀に滅亡した後も、チベット族はこの地を出ることがなかったからであるとされている（田畑他 2001：113）。このため、チベット族は、長期間ほぼ同一地域で居住することになった。このような

ことから、チベット族の間では、以下のように5つの地域に分かれ、それぞれ異なる地域名で呼ばれることになった<sup>12)</sup>。その5地域とは、

- a. チベット北部の遊牧地帯——アムド（安多）
- b. チベット東部の遊牧地帯——カム（西康）
- c. チベット中央部のラサ地方——エイ（衛）
- d. チベット南部の穀倉地帯——ツァン（蔵）
- e. チベット西部の遊牧地帯——アリ（阿里）

である（村松 1973：199）。現在では、上記の c. d. e. の3地帯および b. の西半分の地域がチベット自治区となっている。

このような特色を有するチベット族は、既に本文の註5)において指摘したが、主として政治上の理由により、伝統的に集中して居住してきたチベット高原を離れ、周辺の地域に移動し、居住するものが増加している。本稿では、チベット高原の東南端に接している雲南省に居住するチベット族を研究対象としているので、以下において多少冗長となるがこの点を補足しておくことにする。

すなわち、上述した政治上の理由とは、チベット高原においては、長らく政府の官僚、貴族・土司およびチベット仏教寺院の僧侶の3大領主階級がほとんどの土地を占有していた。この3大領主階級だけで、総人口の約80パーセントを占めるといわれている、他の階級である遊牧民を含む農奴を支配していた<sup>13)</sup>。このような状況が大きく転換を遂げることになったのは、中華人民共和国成立の2年後の1951年5月、当時チベット族を支配下に置いていたチベット仏教の最高位の活仏ダライ・ラマ政権と中国政府との間に、17カ条で構成される「平和の解放協定」が締結されたからであった。つまり同協定は、ダライ・ラマ政権およびその立場を強く支持する上述の3大領主階級は、自らの保全が確保されるという条件と引きかえに、中国の軍隊である人民解放軍のチベット駐留を承認するという内容を主としたものであった。しかし、同協定締結後、3大領主階級は、チベットに駐留した人民解放軍が農奴階級などと協力してその地位を剥奪される動きがあることをいち早く察知した。そこで、領主階級は、人民解放軍に先手を打って打撃を加えようと、1959年に中国

政府（直接には人民解放軍）に対して反乱を企てた。

しかし、この自らの地位の保全をねらう領主階級の反乱は、わずか1ヶ月足らずで圧倒的に軍事力に勝る人民解放軍によって鎮圧された。そのため、反乱を起こした当事者を中心に、ダライ・ラマを擁してネパール経由でインドに逃亡した。このダライ・ラマと行動を共にし、チベットを去ったのは3大領主階級に所属するほとんどの人びとであった。その結果、この反乱以降、チベットは勝利した中国政府の手によって民主改革が実施されることになり、1965年に最初のチベット自治区人民大会がラサで開催され、そこで中国政府により正式にチベット自治区が承認され、成立した。

これに対して、その後、中国政府の政策を嫌う住民やダライ・ラマを崇拝する人びとなどが政治的難民として、大挙チベットを去ることになった。チベットを去ったチベット族の行先は、チベット高原とほぼ自然条件が等しいチベット周辺地域が多かった。チベット族の行き先には、古くからチベット族が居住していたこともあり、これらのチベット族の縁者や親類を頼って移動して来た人びとが少なからずいた。その周辺地域のチベット族の移動先の1つが本稿の対象地域である雲南省迪慶自治州香格里拉県なのである。

雲南チベット族と一般に称せられているチベット族は、以上論じたような経緯でチベットから移動して来たチベット族をいう。その特色は、中国政府の政策を嫌い、チベットを去ったのであった。しかし、当地域に移動して来たチベット族の多くは、他の地域やあるいは外国に去って行ったチベット族と比較すると、前述したように、当地域に定住しているチベット族の縁者や親類を頼ってやって来た者が多数存在するという点である。その理由は、古くから当地域にチベット族が定住するようになったのは、雲南省特産の茶葉とチベット産の特産物である薬草、塩、馬などとの交易を中心に行なった茶馬古道<sup>14)</sup>と呼ばれる交易ルートが当地域に通じており、それに従事する者などがチベットから雲南省に来住し、定住することになったことなどによる、と推察される。

### 3. 雲南西北部の少数民族の生業形態の特色——チベット族を中心に——

前項で論を展開してきたように、チベット自治区と接する迪慶藏族自治州を中心とする雲南省西北部には、チベット族（雲南チベット族と一般に称される）が集中して居住している<sup>15)</sup>。この地域におけるチベット族の生活空間は、チベット自治区と同様に海拔高度が非常に高い場所に位置している。すなわち、同地域に分布・居住している少数民族<sup>16)</sup>の中では、もっとも海拔高度が高い標高1,900～4,000メートルに集中している（金丸2008：10）。同地域には、チベット族の他に、リス族、イ族、プイ族、ナシ族、ペー族がいわばモザイク状に分布・居住している。しかし、これらの民族集団は、ほぼ同一の地域に共存の状態では居住しているのではない。すなわち、各々の少数民族間においては、海拔高度差による垂直的、あるいは地域つまり水平的な住み分けをそれぞれ実施している、という住み分け現象がみられる<sup>17)</sup>。そのため、拙稿（金丸2008：13-16）でも既に指摘した如く、それぞれの少数民族の生活空間では、気候や地形に代表される自然地理学的条件が異なっているので、住民の生活の経済的基盤とでも称すべき生業形態においても相違が確認できる。

すなわち、迪慶藏族自治州を中心とする雲南省西北部では、山間部という交通上の問題および人口密度が非常に稀薄であることなどから産業があまり発達していない。それ故、この地域の主要な生業形態は、農業および牧畜業である。しかも、前者の農業は気候条件などから実施できるのが海拔高度2,000メートル以下の地域に限定される。そのため、雲南省西北部に分布・居住する少数民族の中で農業が生業の中心となっているのは、この海拔高度より以下に居住するナシ族、ペー族の2集団である。そのうち、海拔高度が1,500～1,900メートルと高所に住むナシ族は、畑地においてトウモロコシや小麦の栽培を中心に行なっているが、条件が良好な場所では水田稲作も実施している。このナシ族に対して、より低位の海拔高度900～1,500メートルに分布しているペー族は、水田稲作主体の農業を展開している。このように、経営形態に相違がみられるが、両民族の生活空間は農業に適している。そのため、古くから漢族が進出

して来たことから、漢化現象がとくに進んでいる。両民族の主要な分布地域としては、雲南省西北部の中でも南部に偏在している。

一方、上述のナシ族およびペー族よりも、より高い海拔高度の場所を生活空間としている、プミ族、イ族、リス族、チベット族では、農業と共に、牧畜業が生業として加わることになる<sup>18)</sup>。しかも、これらの少数民族間においても詳細に検討すると、海拔高度の高い場所を生活空間としている民族集団ほど、牧畜業に依存する比率が高くなっている。その理由は、気候、地形などの自然地理学的条件から、農業を実施することが困難となってしまふからである。とりわけ、本稿の研究対象民族であるチベット族は、上述したように、この地域においてはもっとも高所に生活空間を置いている民族集団である。それ故、同地域に分布・居住する少数民族の中では、牧畜業に依存する比率がもっとも高いのである<sup>19)</sup>。

迪慶藏族自治州を中心とする雲南省西北部に集中して居住するチベット族、すなわち雲南チベット族が農業を行なっているのは、海拔高度3,000メートル以下である。海拔高度が3,000メートル以下であれば、気温が上昇する夏季のみに農業が可能で、主として非常に耐寒性に優れているチンクー麦やソバなどが栽培されている<sup>20)</sup>。

チベット族が実施している牧畜業は大きく分けて2種類の異なる経営形態がみられる。牧畜業は、牛や馬などの家畜を飼育する専有家畜小屋および放牧するための決められた牧場や牧草地が必要であるとされる。前者の専用の家畜小屋で年間を通して家畜を飼育する場合を舎飼い、後者については、家畜を数ヶ所の牧場や牧草地などに放し飼いにするので移動放牧と一般的に称されている。

移動放牧には、さらに以下に述べる異なる2種類の経営形態が存在する。その第1の経営形態は、遊牧と称されている経営形態である。この経営形態の特色は、特定の人為的に区切られた牧場で家畜を放牧するのではなく、牧草を求めて広大な土地を水平的に移動するというもので、モンゴルや中央アジアなどの平坦な地域に典型的にみられる。家畜を追う牧民（牧夫ともいう）も家畜と共に移動生活を送っている。その第2の形態は、季節的に移動放牧するもので、移牧（トランスヒューマンス）

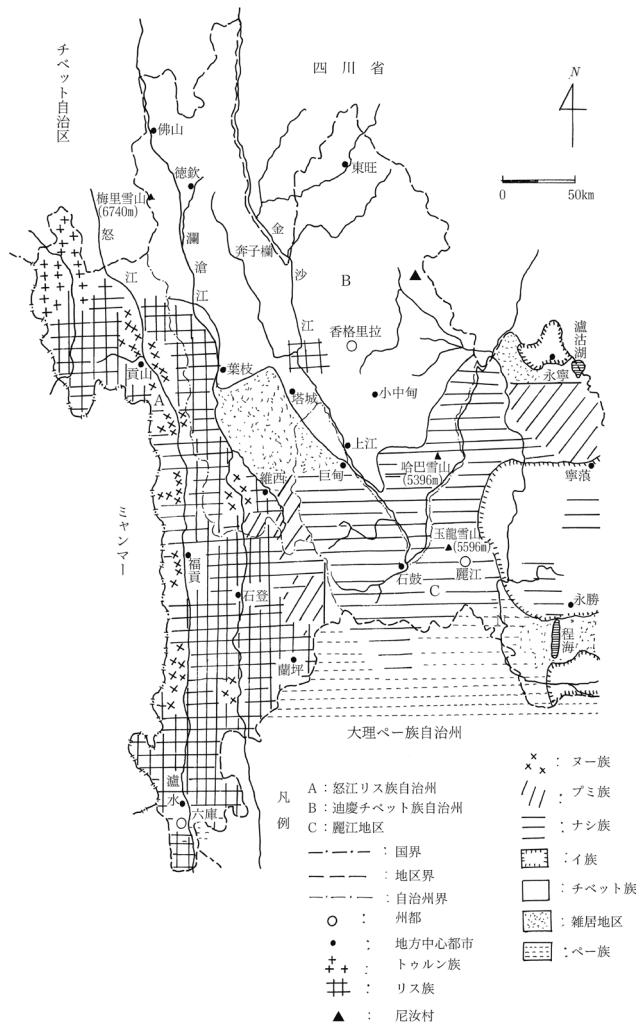
と称せられているものである。この経営形態の特色は、夏季に山麓など平地の乾燥を避け、より雨や牧草の多い山地に家畜を追って移動し、冬季は山地での寒さを避け、山麓などの平地に下りてくるという垂直的な移動パターンを毎旬繰り返している。つまり、季節的な移動往復運動を行なっている。地域的には、地中海周辺に典型的にみられ、西南アジア、インド北部など広範囲にわたって分布している（谷 1976：10）。

チベット高原において実施されている移動放牧は、ヤクや馬などの遊牧が主体であるが、雲南チベット族が行なっているのは移牧と呼ばれている経営形態に近いものである。それ故、同じチベット族が行なう牧畜に関しても、その経営形態が異なっている。このように、両地域によって異なる理由としては、チベット高原では周囲に高峻な山脈がみられるが、中央部は海拔高度が高いものの、比較的平坦地であり、かつ広大な土地が連続しているため、牧草を求めて水平的な移動が実施しやすいためと推察できる。これに対して、雲南省西北部は、高峻な山岳地帯もその間を流れる河谷地帯が大部分を占めるため、地域間の海拔高度差が大きいうえに、それぞれの地域が狭いため、遊牧のように水平的な移動が困難であるためと考えられる。

#### 4. タンディアオ（唐掉）家の場合

雲南省西北部に位置する迪慶藏族自治州香格里拉県洛吉郷尼汝村は、典型的な雲南チベット族が居住する集落である（第1図）。尼汝村が所属する洛吉郷は、香格里拉県の東端にあり、四川省凉山彝族自治州と接している。洛吉郷の面積は1,234平方キロメートル、人口は4,293人である<sup>21)</sup>。洛吉郷は3つの行政村から構成されている（第1表）。すなわち、ナシ族を主体に、リス族、イ族および数人からなる少数民族と、漢族が同一集落間に雑居している洛吉村<sup>22)</sup>、住民全員がイ族によって構成されている九龍村<sup>23)</sup>、九龍村同様に住民全員がチベット族からなる尼汝村である。





第1図 地域概略図

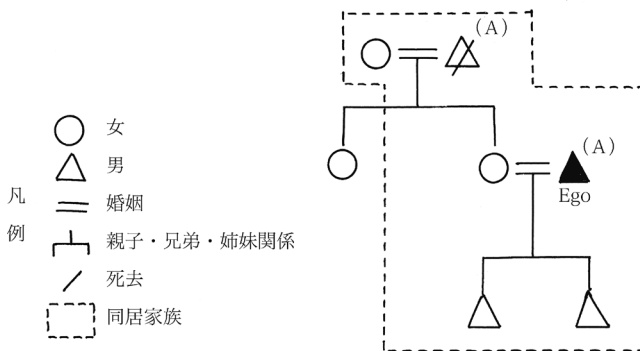
〔資料〕《民族問題五種叢書》雲南省編輯委員会編（1983）：『納西族社会歴史調査』雲南民族出版社付図などにより作成

〔出所〕金丸良子（2008）：「中国雲南省西北部における主要少数民族の住み分けモデル」『言語と文明』6，15頁第1図を一部修正して引用

第1表 香格里拉県洛吉郷の概況（2006年）

項目 行政村	戸数(戸)／人口(人)	生業形態	主要民族	備考
洛吉村	517／約2400	半農・半牧	ナシ族・リス族・イ族	19の村民小組
九龍村	約300／約1100	半農・半牧	イ族	10の村民小組
尼汝村	110／642	牧主農従	チベット族	3の合作社・4の村民小組

〔出所〕洛吉郷人民政府での聞き取りにより作成



第2図 タンディアオ家の家族構成

註) (A)：婿入り

〔出所〕聞き取りにより作成

以上の3ヶ村のうち、調査対象であるタンディアオ家は、尼汝村を形成する4つの村民小組<sup>24)</sup>の1つ普拉に所属している<sup>25)</sup>。普拉の戸数は39戸、人口は100人余である。尼汝村の生活の経済的基盤は、ほとんどが牧畜業に依存している。その中でも、とくに普拉は、全戸数が牧畜業によって生計を立てているという、典型的な牧畜の集落である。

タンディアオ家は、現在、主人（38歳）とその妻、2人の息子、妻の母親の合計5人家族である（第2図）。当家は、50頭のヤクを飼育の中心とする、洛吉郷尼汝村では、中規模程度の標準的な家庭である。尼汝村では、上述したように村を構成するすべての村民小組（自然村）はチベット族であるが、大半の家では、タンディアオ家と同様に、ヤクの飼育を

主体とする牧畜業を営んでいる<sup>26)</sup>。タンディアオ家でも、他家にみられる如く、香格里拉県の中学校に行っている長男を除いて、家族全員がヤクを中心とする家畜の飼育に従事している。

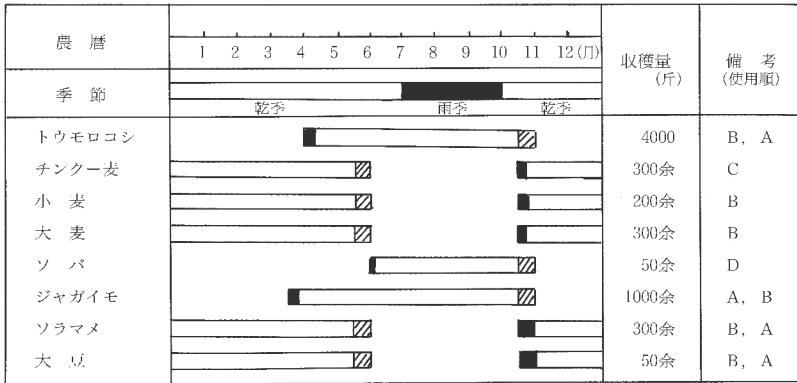
雲南チベット族を含むチベット族にみられる牧畜業を営む集団は、一般に独自の形態を採用している父系制社会であるといわれている。その場合の独自というのは、次のような形態を採用しているからである。すなわち、その形態を、チベット族のフィールドサーヴェイを行なった高山龍三の著作（高山1992：134-135）からの説明によると、チベット族<sup>27)</sup>の各個人は、父親の氏族を意味するリュイパ（骨）と、母親の氏族を受け継いだシャ（肉）によって成り立っていると考えられてきた。つまり、各人は、父親のリュイパ（骨）を自分のリュイパ（骨）とみなし、また父親のリュイパ（骨）同様に、母親のもつシャ（肉）を自分のシャ（肉）と称するが、この母親のもつ氏族の象徴であるシャ（肉）は、例えば、本人と祖父母、あるいは本人と兄弟などの2親等を超えると消滅してしまうとされる。それ故、その代になると、この集団は、母親つまり女系の氏族とは関係がなくなり、父親つまり父系の氏族のみにつながることになるのである。すなわち、チベット族は、このような多少複雑な独自の父系制を採用しているのであるとされている。

しかし、タンディアオ家の家族構成を示した第2図では、祖父母を超える祖先つまり2親等を超える祖先がたどれなかったことなどから、上述のようなリュイパ（骨）と母親のシャ（肉）の関係は明確に読み取れなかった。すなわち、主人および主人の父親も婿入りして当家にやって来ている。それ故、一見当家は女性が家を継ぐ母系制を採用しているように考えられないこともない。しかし、この点に関しては、当家では姉妹しかいなかったために、長女に婿を迎えたとも解釈できる。また父親に関して、母親に兄弟がいたかいなかったかが不明なため、どのような理由で父親が婿入りしたかは不明である。

タンディアオ家の生業形態に関しては、上述したように、牧畜業が主体であるが、自宅の周辺に耕地を有し、農業も行なっている。最近1ヶ年間の当家の農業カレンダーを作成したのが第3図である。当家では8畝

(1 畝は約 6.67 アール) の耕地にトウモロコシ、チンクー麦、ジャガイモおよびソラマメなどの豆類が栽培されている<sup>28)</sup>。しかし、栽培されている農作物の種類も少なく、量的にも多くない。この点は、当村の位置している海拔高度が 3,000 メートルを超えていることから、大変冷涼となり、農作物の栽培には適さないためと推定できる。しかも、当家では、栽培している作物の多くはヤクなどの飼育している家畜の飼料となっている。この点からも、当家が牧畜業に大きく依存していることがうかがえる<sup>29)</sup>。このことは、当家で最大の収穫量を誇るトウモロコシが自家消費費用に供され主食の一部となっているとともに、ヤクなどの家畜の飼料となっていることから、容易に推察される<sup>30)</sup>。

当家の家畜の種類は、耕地で栽培している農作物と比較すると、豊富でその頭数も比較的多い。当家では、ヤク 50 頭を中心に、牝牛 1 頭、黄牛 3 頭、馬 9 頭、羊 3 頭、山羊 12 匹、豚 6 匹の家畜を中心に、鶏 10 羽



第 3 図 タンディアオ家の農業カレンダー (2006 年)

凡例  
■ 播種  
▨ 収穫

註) A: 自家消費  
B: 家畜の飼料  
C: 酒の原料  
D: モチの材料  
他に牧草 2000 斤余収穫

〔出所〕タンディアオ家での聞き取りにより作成

を飼育している。

タンディアオ家では、上述したように、多種類の家畜を飼育している。これらの家畜は合計10ヶ所にもおよぶ村の共有地である放牧地に連れて行き、放牧を行なっている。放牧の形態は、ヤクを中心とする家畜を季節ごとに、牧草を求めて山腹斜面にある放牧地を移動するという方式が取られている。家畜を飼育している男女は、当地では牧民と呼ばれることが多いが、牧草を求めて移動する家畜を追って生活している。そのため、放牧の形態は遊牧に近いものである。しかし、通常の遊牧では、例えば、トルコ共和国に居住するユルック族の事例<sup>31)</sup>にみられる如く、遊牧を行なう遊牧民は、牧草や水を求めて移動する家畜を追って、年中チャドル（黒ヤギの毛皮で被った移動式テント）で移動生活を営む。それ故、定住する固定住居を持たず、農耕を行なう耕地も所有していない。そのため、現金収入源は、飼育している山羊、羊、ラクダなどの家畜の毛、チーズ、バターなどの乳製品の売り上げが中心となる。すなわち、遊牧民ユルック族は、これらの商品を販売することで、麦などの食糧を購入している。

この点に関して、タンディアオ家を筆頭とする雲南チベット族の牧畜業は、現金収入の大半を、上述のユルック族と同様に、刈り取った毛や乳製品の販売が主体であるが、広い面積といえないが各戸とも耕地を所有し、農作物を栽培している。この耕地において栽培されている農作物は、既に指摘したように、売却目的ではなく、自給用として使用している。しかし、その一部は家畜の飼育としても用いられている。この点が、雲南チベット族の牧畜業の特徴といえる<sup>32)</sup>。この点と関連するが、タンディアオ家の場合、耕地を所有していることも関連すると推定できるが、それぞれの放牧地（牧場と称される）に牧民が居住可能な小規模の固定された小屋が建てられている。この小屋は、放牧地同様村民共同で使用可能で、空いていれば村民であれば利用できる。すなわち、一般にみられる遊牧民のように、家畜と共に、折りたたみ式のテントで移動していないのである。以上論じた如く、耕地の所有、および宿泊可能な固定型的小屋を放牧地にもつという2点が、ユルック族に代表される典型的な遊

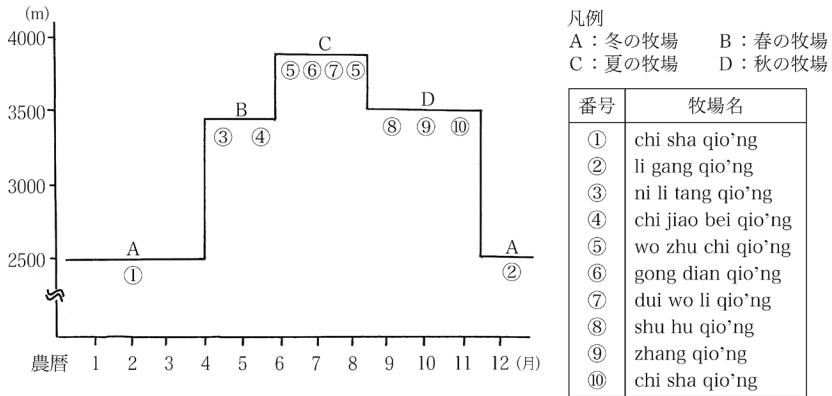
牧民とは異なる。それ故、雲南チベット族は典型的な遊牧民とはいえず、遊牧民に近い農牧民とでも称するのがより正確に表現しているのではないかと推察される<sup>33)</sup>。

タンディアオ家では、放牧を次のように実施している。すなわち、放牧を行なう牧場と呼んでいる放牧地は、1年を1つのサイクルとして放牧ルートが固定されているので、毎年ほぼ決まったコースを順々に巡回することになる。このように、タンディアオ家が家畜を追って回る放牧地は、村内に限定される。その放牧地は、前述したように、村民の共有地である。タンディアオ家が巡回する牧場は、山腹上の傾斜地に位置している。その牧場は10ヶ所を数える。これらの牧場は村民の共有地であるので、利用する場合、優先権が存在するのではなく、村民であれば自由に利用できることとされる。しかし、牧場をそれぞれの村民が使用する期間には暗黙の了解があるようである。

タンディアオ家の場合、放牧には県城にある寄宿舎から中学校に通っている長男以外、家族全員が参加して従事している。しかし、農繁期には家族の一部が放牧地を離れて、chi sha qio'ng と呼ばれている冬の牧場近くにある本村（尼汝村普拉）に帰る。なお、chi sha qio'ng をはじめ、当家が使用している10ヶ所の牧場については、その牧場が位置している場所の地名とその末尾に qio'ng（チョン）を付けて表現される。chi sha qio'ng の場合は chi sha が地名で qio'ng は高山にある小屋という意味をもつ、現地のチベット語である。

タンディアオ家の10ヶ所にもものぼる牧場つまり放牧地の海拔高度を示したのが第4図である。この第4図から分かるように、当家では春、夏、秋、冬の四季ごとに、海拔高度が異なる2ないし3ヶ所の牧場を家族と共に巡回している。以下では、この第4図を参照しながら、放牧の様子を紹介していく。

春季（3月-4月下旬、農曆以下同様）には、およそ海拔高度が3,400メートルの場所に ni li tang qio'ng, chi jiao bei qio'ng とそれぞれ呼ばれている異なる牧場で放牧が行なわれる。両牧場のうち、多くの期間を前者の ni li tang qio'ng で過ごす。近くに布遠錯湖という小規模な湖が存在する。その



第4図 タンディアオ家の牧場サイクル

〔出所〕 タンディアオ家での聞き取りにより作成

影響を受けて牧草が比較的良好に茂り、水量も豊かである。春季の終わりの10日間程は、場所を移動して chi jiao bei qio'ng で放牧する。この牧場の特色は、当家がその一部に耕地（0.4 畝）を所有していることである。この耕地では、自家消費に供する作物ではなく、家畜の飼料となる牧草を栽培している。牧草は5月下旬に種子を播くと、10月には刈り入れが可能となる。これらの牧草は直接家畜に食べさせることもあるが、干し草として保存され、不足時の予備とされる。2006年には、2,000斤余（1斤は500グラム）の収穫を得た。

夏季（6月-8月初旬）になると、春の牧場から数百メートル高所となる、海拔高度3,700~3,800メートルに位置する夏の牧場に移る。夏季全体は約2ヶ月余りと短期間なのであるが、3ヶ所の牧場を移動する。最初には、wo zhu chi qio'ng に滞在する。期間は、毎年多少異なるが、5月末から6月にかけての20日間ぐらいであった。それ故、ごく短期間、丁汝湖と呼ばれている小規模な湖の近くの gon dian qio'ng に滞在する。ここは湖が近くにあるので、とくに水量が豊かな放牧地である。そこから、dui wo li qio'ng に移り、6月末まで滞在する。当地での滞在も長くはない。夏季の7月に入ると、再度 wo zhu chi qio'ng に戻り、放牧をはじめ。ここ

には、8月初めまで滞在し、放牧を続ける。

秋季（8月中旬-11月）には、夏季と同様に3ヶ所の牧場で放牧する。これらの牧場は、夏の牧場から数百メートルほど低い場所に位置している。海拔高度としては、春の牧場とほぼ等しい。しかし、放牧地はまったく異なる場所である。最初の牧場は、shu hu qio'ng と呼ばれる牧場である。2007年度では、ここに7月12日にやって来た。この牧場では10月初旬まで約3ヶ月間滞在して放牧する予定である。当家の牧場としては、もっとも長期間の放牧地となる。そのためか、この牧場に併設されている小屋は簡素な作りであるが、他の牧場に併存して建てられている小屋よりも堅固にみえた。その後10月末までの約20日間、zhang qio'ng と称する牧場に移り、放牧する。さらにその後約10日間前後は、chi sha qio'ng とよばれている牧場で放牧する。ここでの放牧が短期間なのは、牧草が充分でないためである。

冬季（12月-3月）は大変冷涼なため、放牧する牧場の海拔高度は1,000メートル以上も下がる2,400~2,700メートルの地点である。最初に滞在する li gang qio'ng は、本村（尼汝村普拉）から3~4キロメートルの場所にある。ここでは、12月末までの約1ヶ月間滞在する。その後、約3ヶ月弱滞在する chi sha qio'ng に向かう。ここで年越し（春節）を迎えることが多い。そのため、年越しでも本村に戻らないことが多い。家畜の世話が大変で、長期間牧場を離れられないからである。

以上やや詳細に述べたように、タンディアオ家では、毎年10ヶ所の牧場を、一部の牧場は重複するが、同様のルートに従って移動している。その特色は、第1に、各牧場に滞在する期間が長期間といっても、秋の牧場である shu hu qio'ng や冬の牧場である chi sha qio'ng の約3ヶ月間である。この点は、当地域の牧場では食糧となる牧草や水量が充分でないからである、と推定できる。第2は、第1と関連するのであるが、充分でない牧草を補うべく、本村以外の牧場の中に耕地を所有し、牧草を栽培していることである。第3は、最大の年中行事とされる春節さえも、本村で家族そろって迎えることができないほど、ヤクを中心とする家畜の世話が多忙なことである。これらの諸点は、遊牧あるいは農牧をしてい



る他地域の遊牧民や牧民にとっても共通した理由であろう、と推察できる。

以上のように、タンディアオ家は10ヶ所にもおよぶ牧場を移動しながら放牧に従事している。以下では、その主要な作業について検討していくことにする。

飼育している家畜の中心であるヤク、牦牛、黄牛などは15日に1回一定の割合で粥が与えられる。粥を与えなければ体重が減少し、元気がなくなるからである。粥は、トウモロコシ、ソラマメ、チンクー麦、大麦など耕地で栽培された作物および購入した雑穀類などを混ぜて粉にした後、それを煮たものである。多くの家畜に粥を均等に与えなければならないので、この作業が重労働となっている。固定した小屋の中に立派な囲炉裏が設置されているのはこのためである。囲炉裏の上には、常に大鍋が置かれている。粥づくりや後述する乳製品づくりには欠かせないためである。

搾乳は冬季には実施しない。ミルクの量が多くないからである。そのため搾乳は気温が上昇しはじめた4月から開始し、9月末まで行なう。搾乳したミルクは生乳で販売することができない。消費地である県城や地方中心集落である鎮など消費が期待できる場所から遠いからである。それ故、搾乳したミルクは、一部を自家消費用として飲用したり、ヨーグルトがつくられるが、多くはバター、チーズという保存のきく乳製品とされる。当家では、2006年度1キログラムの大きさのバターを50個つくり、1個当たり50円で売却した。売却先は郷の市場で、専門の仲介人である。なお、ヤクは早朝に1度、牦牛と黄牛は朝夕の2度搾乳する。とくにヤクは気性が荒い。そのため、子供をそばに連れてきて気性を静めたり、搾乳前に好物である少量の塩をなめさせ、機嫌を伺ってから開始する。この作業は女性の役割となっている。

この他の収入源としては、2006年にヤク（成牛）3頭を合計1万余元で売却した<sup>34)</sup>。売却するのはオスが中心で、7～8年飼育して成牛になったものが対象となる。ヤクの売却は体重によるのではなく、1頭の大きさにより価格を決定するとされる。また同年には、羊（綿羊）2頭を1頭

280 円で売った。なお、ヤクや羊の毛は夏季に刈り取るが、年間それぞれ 30 斤ほどの毛を刈り取った。これらの毛は、自家用に使用する毛布、坐布団、マントなどを織るために用いるので、売却しない<sup>35)</sup>。

その他の現金収入源としては、近年周辺の山中で採取できる松茸の販売があげられる。松茸は、郷などで開催される市場に持参して販売するのではなく、トラックなどに乗車した仲介人が直接買いに来る。当家中では、2006 年には、2,000～3,000 元ぐらいの収入を得た<sup>36)</sup>。

以上、タンディアオ家の現金収入は、雲南省の一般の農家の収入と比較すれば高収入を得ているといえる。しかしながら、同家では各牧場の移動にバイクを使用しているのでその燃料費、さらには家畜の飼料代など出費も多い。また食糧も大半を購入している。そのため、比較的高収入を得ても豊かであるとはいえない。

## 5. 結 語

タンディアオ家を事例として、雲南チベット族の牧畜業について論を展開してきた。それ故、雲南チベット族の牧畜業を営む典型的な雲南チベット族の家庭の分析とはいえ、雲南チベット族の牧畜業の全体像を正確に把握できたかどうか不安が残る。この点を克服する手段として、本来であれば、より多くの事例を収集したり、チベット族の他地域の牧畜業と比較したりして、客観性をこれまで以上に高めて、雲南チベット族の牧畜業について論じなければならないことは、当然のことといえる。

しかしながら、タンディアオ家のみ分析・検討からも、雲南チベット族の牧畜業の特色に関しては把握し得たと思われる。その点を要約して述べると、

- ①雲南チベット族の牧畜業は、放牧と同時に、多くないが耕地を所有し、農業にも従事するという、いわゆる農牧型の牧畜業を行なっているが、農業よりも放牧にウェイトが高い遊牧型に近い農牧業であることが確認できた。
- ②牧場と称されている放牧地は山腹斜面上にあり、冬の牧場と夏の牧

場との海拔高度差は1,500メートル近くにも達している。これらの牧場を季節ごとに垂直方向に上り下りして放牧をしているので、移牧の形式を取ることになる。この点は、チベット族の最大拠点であるチベット高原においては、平坦な高原を水平方向に移動して放牧している、遊牧型の放牧とは異なる形態であることが判明した。

以上の2点に大きく要約できる。これらの点は、タンディアオ家など雲南チベット族の牧畜業の顕著な特色といえよう。

このように、牧畜業は雲南チベット族をはじめ、チベット族の主要な生業形態であるといえる。しかし、従来、チベット族の牧畜業に関しては、チベット族の最大拠点であるチベット高原でのフィールドサーヴェイに基づく詳細な調査・研究はほとんど等閑視され続けられてきた。その理由としては、チベット自治区の大半が、対外「未開放地区」とされている事実からも推察できるように、外国人研究者が自由に立ち入って調査できないということに起因している。このような事情から量的には多いとはいえないが、チベット族の牧畜業に関する調査・研究は、中国以外の周辺国や地域において進められてきた。日本人研究者でいえば、高山龍三や月原敏博などの研究（高山1960, 月原1990, 1996）もすべて中国以外の事例研究であった。

このような研究動向に対して、本稿は、チベット族の最大拠点であるチベット高原を中心とするチベット自治区における事例研究ではないが、チベット自治区と接する雲南省に居住するチベット族の牧畜業に関する、フィールドサーヴェイに基づいた事例研究である。この点からも、本稿は、社会主義体制を現在でも堅持している中国国内の研究なので、詳細な調査・研究を実施することが非常に困難であるチベット族の最大拠点であるチベット高原の牧畜業と、中国領ではなく、非社会主義体制を採用している国や地域でのチベット族の牧畜業との間を埋める役割を担う研究であると、位置づけることができよう。牧畜業に限らず、チベットを含む西南中国の物質文化に関して大いなる関心を有しているので、機会があれば、チベット高原の牧畜業についても、調査を実施したく念じている。

[付記] 本稿の骨子は、平成20年5月31日～6月1日に開催された日本文化人類学会第42回研究大会（於京都大学）において、口頭研究発表「雲南チベット族の牧畜業 タンディアオ家の場合」(共同研究発表)した。その発表要旨は、『日本文化人類学会第42回研究大会プログラム・発表要旨集』238頁に収録されている。

## 註

- 1) 中国においては、少数民族はたんに人口規模が小さい民族集団であるという理由だけではなく、それぞれの集団の申請に基づき政府によって認知される必要がある。そのため、公表されている最新の人口統計である「2000年度人口センサス」においても、西南中国の一角を占める貴州省を中心に70万人以上の人びとが政府によって認知されていない。すなわち未識別民族とされている。
- 2) 漢族の民族文化に関しては、華北の山東省に居住する漢族を調査・研究対象とする、フィールドサーヴェイの成果を最大限に取り入れた拙著（金丸1987）を刊行している。また西南中国に分布・居住する少数民族に関しても既に拙著（鈴木・金丸1985, 田畑・金丸1989, 1995, 金丸2005）を出版している。
- 3) 同様の趣旨によって、ミャオ族を分析した著作（金丸2005）がある。
- 4) 中国では青藏高原と称されている高原を指す。青藏高原は、中国の西部から西南部にかけて、東西方向に走る高峻な山々が重なる山脈が展開する山地性の高原である。青藏高原は広大なため、主として地形などの相違により、蔵北高原、蔵南谷地、チャイダム盆地、祁連山脈、青海高原などに大きく区分される。そのうち、チベット自治区のほぼ中央部を占める広い面積をもつ蔵北高原を別名チベット高原と呼んでいる。一方これに対して、日本では従来から蔵北高原などを含む青藏高原と総称される高原全域をチベット高原と称してきた。しかし、青藏高原とは前述の如く、蔵北高原や蔵南谷地などの地域を総称した名称である。それ故、厳密な意味においてはチベット高原とはいえない。（田畑他2001：10-11）。このように、チベット高原の概念が日中両国間では異なっている。本稿では、従来からわが国で一般的に使用されてきた意味、つまり中国でいう青藏高原のことをチベット高原と称する。
- 5) 現在、これらの中国国外に分布・居住しているチベット族の多くは、自ら進んで国外に移住したのではなく、中国政府の政策を嫌って国外に亡命した、

チベット仏教最高位の活仏ダライ・ラマ 14 世 (Ngag dbang blo bzang ye shes bstan'dzin rgya mtsho) を慕って国外に退却したものである。

- 6) なお青木文教によれば、吐蕃とは「ポエ」の意識「吐」と、音訳「蕃」を組み合わせた名称であるという (青木 1969: 10)。
- 7) 現在の中国ではツァン (蔵) 族と呼んでいる。この名称は、チベット族の中心地ラサなどが位置する中・南部地方をツァン (蔵) と称していることに起因するとされる。
- 8) 従来、漢・チベット語族は、シナ・チベット語族と称されてきた。しかし、シナ・チベット語族という表現は不適當と考えられるので、村松一弥の著作 (村松 1973) に従って、本稿では漢・チベット語族と変更した。
- 9) 一般には、中国におけるイスラム教を信仰する民族集団を指す。しかし、中国に居住するトルコ系言語を話すイスラム教徒がウイグル族と称せられている (張 1993: iii) ように、中国に分布・居住するすべてのイスラム教徒が回教と呼ばれているのではない。
- 10) この語群をデーヴィス (Davis H. R) のように、東南アジア南部に起源をもつオーストロアジア語族の一分派モンクメール語系 (Mon-khmer family) に入れるという説も存在する (Davis 1909 田畑・金丸編訳 1989: 413-422)。
- 11) この語群に所属する民族集団にトン族がいる。トン族の自称は「カム (Kam)」なので、言語系統など言語学の表記では「カム」とされることが一般的である。それ故、本稿ではトン・タイ語群ではなく、カム・タイ語群とした。
- 12) このような地域区分に対して、中国国内の研究者による方言を中心とした言語系統による区分は、基本的には同様であるが、5 区分ではなく、以下のような 3 つの方言区に大きく区分している (国家民委民族問題五種叢書編輯委員会《中国少数民族》編写組 1981: 257)。

①ウエイ (エイ) ツァン (衛蔵) 方言区

②カム (康) 方言区

③アムド (安多) 方言区

つまり、本文で論じた c. と d. の地域が①に、b. の地域が②に、a. の地域が③、の各方言区にそれぞれ該当する。さらに、各方言区に居住するチベット語族は、①ではチェンツァン (前蔵)、あるいはウエイバ (衛巴)、②ではカンパ (康巴)、③ではアントワ (安多哇) と自称している。なお、「衛」はチベット語では「ユイ」、中国語では「ウエイ」と発音する。また本文 e. のアリ (チベット語名ハンガリ Nga-ri) と呼ばれる地帯は、人口が約 7 万人ぐらいと少ないためか、方言区としては区分されていない。

- 13) 以下のチベットの歴史に関しては、欧米人の研究者が書いたチベット近現代史の研究書としては非常に高い評価を受けているグリンフェルド (Grunfeld) の著作 (Grunfeld 1987 八巻訳 1994) を主として参考にした。
- 14) 雲南省、四川省とチベット自治区との間を結ぶ古代から発達した交易ルート。茶馬古道という名称は、チベット特産の馬を使って茶葉などの商品を運搬したことに起因するとされる。本稿の対象地域である迪慶藏族自治州香格里拉県はその古道が通じており、とりわけ県城 (県の行政中心地) 香格里拉はその古道の拠点の1つであったからである。茶馬古道は、現在では西南中国最大の観光スポットとなり、国内の観光客以外にも外国人観光客も増加している。なお、茶馬古道に関しては『茶馬古道』(《茶馬古道》編集部編 2003) をはじめとする旅行案内書が出版されたり、グラビア雑誌『人民中国』(人民中国編集委員会編 2006) で紹介されている。
- 15) 雲南省の人口は約 4,450 万人である (2005 年度人口統計)。その民族別人口は、2005 年度人口統計の結果はまだ公表されていないので、公表されている最新のものである 2000 年度の統計によれば、漢族が 66.6 パーセントで大部分を占めている。次いでイ族 (11.1 パーセント)、ペー族 (3.6 パーセント)、ハニ族 (3.4 パーセント) など 20 を数える少数民族が続く。チベット族は、少数民族としては第 14 位で、0.3 パーセントを占めるにすぎない。同省に居住するチベット族は、このように決して多くないが、ほとんどが前項で論じた自称カムと称するチベット族である。チベット自治区は総人口が約 277 万人であり、そのうち 92.8 パーセントをチベット族が占めている (総人口は 2005 年度人口統計、民族の比率は 2000 年度人口統計による)。
- 16) なお、同地域には雲南省において多数派を形成する漢族はほとんど居住していない。
- 17) 雲南省西北部は山地性高原が卓越している。すなわち、地域内には、高峻な横断山脈が南北方向にほぼ規則正しく走っている。そしてその山脈の間をタンルウィン (サルウィン) 川上流怒江、メコン川上流瀾滄江、長江上流金沙江の 3 河川が流れ、各々深い溪谷を形成している。それ故、地域的つまり水平的な住み分け現象がみられても、山岳地帯および山間支谷地帯がほぼ南北方向に平行して存在するため、民族集団の生活空間に関しては海拔高度差がみられる。そのため、各々の民族集団は垂直的な住み分けを行なっているように見える。
- 18) 勿論、ナシ族、ペー族の場合も農家の多くは豚や山羊を中心とした家畜を飼育しており、その売却が各農家では貴重な現金収入源となっている。しかしながら、これらの農家では、飼育している家畜の数は非常に少なく、両民族

は農民という意識をもっている。

- 19) このように、チベット族の牧畜業に対する比率が高くなるのは、チベット族の元来の居住地であるチベット高原が、雲南省西北部のチベット族居住地域よりも海拔高度が高く、生計の手段としては牧畜以外に考えられないことがあげられる。すなわち、雲南省西北部に来住したチベット族は、既に牧畜を行なう技術を有していたことも、理由の1つとして考えられよう。
- 20) 雲南チベット族の主食は、チベット自治区に居住しているチベット族と同様に、ツァンパ（麦こがし）とバター茶である。ツァンパの原料となるのがチンクー麦である。しかし、これらの食糧は不足するので、牧畜を中心とするチベット族は、バター、チーズなどの乳製品やヤクなどの家畜の毛を売却をし、チンクー麦などの食糧を購入している。
- 21) 以下の香格里拉県洛吉郷の統計数値は、2007年3月上旬に実施した洛吉郷人民政府での聞き取りによる。
- 22) 洛吉村を構成する民族集団のうち、イ族（100人余り）は2002年に同県の南端に位置する虎跳峡鎮より移ってきた。また数人からなるプミ族は、いずれも隣接している四川省凉山彝族自治州木里県の俄亜から嫁として同村にやって来た女性である。なお、洛吉村は、平均海拔高度3,100メートルに位置し、戸数110戸、人口642人である。
- 23) 洛吉郷に接している四川省凉山彝族自治州は、四川省の山間部を最大拠点とするイ族の結集地なので、その影響を受け、九龍村にイ族が集中して居住するようになったものと推定できる。なお同郷の洛吉村の場合がむしろ例外になるのであるが、イ族やチベット族に限らず、少数民族は他の少数民族や漢族との同居を嫌う傾向をもつ。それ故、近年までは異民族集団内の通婚がほとんどみられなかった。しかし、近代化が進展するなかで、異民族集団間の通婚も増加傾向にある。その中でも、漢族と少数民族が結婚した場合、子供は少数民族としての認知を受けることが多い。その理由は、少数民族の場合、漢族と異なり、1人ないし2人の子供を生むことを黙認されているからである。とりわけ、農作業に人力が労働力として必要な少数民族地帯では、この傾向が目立つ。
- 24) 行政府の下部（位）単位としては、一般的には村民小組が置かれている。村民小組は、行政府に対して古くから成立していることなどから、自然村と称されることが多い。しかし、洛吉郷においては、この村民小組と共に、人民公社時代の名残りと推定される合作社（現地では社と呼ばれる）も存在している。しかも、村民小組と合作社は、例えば同県上江郷では、58の合作社、48の自然村（村民小組）（雲南省中甸県地方志編纂委員会編1997：62）とい

うように記され、一部重なっている場合が多い。洛吉村には、4つの村民小組と3つの合作社が置かれている。

本稿では煩雑を避けるため、『中甸県志』(2001年に香格里拉県と改名)の洛吉郷の記述(雲南省中甸県地方志編纂委員会編1997:64)を参考にして、村民小組を自然村と呼ぶこととし、自然村つまり村民小組を研究対象集落とする。その対象集落である普拉に関しては村民小組と合作社は完全に同一の組織である。なお、村民小組はわが国でいう字(小字あるいは大字)にほぼ等しい組織である。しかし、中国では、郷が政府の役人の常駐する末端組織なので、村および村民小組には役人が常駐していない。なお、対象集落の普拉は村民小組と合作社が一致している。

- 25) プラ以外の村民小組すなわち自然村は、尼柵、白柵、塘古である。
- 26) 尼汝村のヤクを中心とする家畜の1戸当たりの頭数を示す資料は存在しない。村内でもっとも多くヤクを飼育しているのは、普拉という集落(村民小組、自然村)に住む、Y家で200頭余りのヤクを飼育している。その次ぎが同じく普拉のD家で100頭余りのヤクを飼育している。村内では、この両家が飼育しているヤクの頭数がとび抜けて多い。
- 27) このチベット族は、ネパールの北西部のトルボ地方に居住している。トルボ地方のチベット族には、雲南チベット族と同様にチベット自治区から移動して来た人びとが多数存在する。
- 28) 当家の農業の主要作物であるトウモロコシ、ジャガイモは中南米が原産とされ、中国西南地域に導入が開始されたのは、ともに16世紀から17世紀ごろと推定されている(星川1998:39,115)。それ故、現在のように、農作業が多少とも可能なことが当地域に定着する条件であったとしたら、タンディアオ家をはじめチベット族の当地域への進出は、それほど古くないと推察できる。

迪慶藏族自治州では、土地改革は中華人民共和国成立後の1955年に着手され、1957年8月に基本的に完了した。その後、人民公社時代を経て、1983年に生産責任制に移行された(雲南省迪慶藏族自治州地方志編纂委員会編2003:667)。洛吉郷が所属する香格里拉県(旧中甸県)では、生産責任制は、1979年に試験的に金江安東大隊の3ヶ所の生産隊において実施された。そしてその成果を受けて、順次県内において生産責任制が導入されることになり、自治州内の他地域より少しおくれて、1984年3月に完全に生産責任制となった(雲南省中甸県地方志編纂委員会編1997:425-426)。

- 29) 当家で栽培されている農作物の中で、とくに注目されるのは、チンクー麦である。チンクー麦は、他の地域では、大麦と共にツァンパの原料として貴重



- な作物であるが、当家では、自家用に消費される酒の原料に用いられている。
- 30) 本来、周辺に年中豊かな牧草が茂っておれば、農作物を家畜の飼料とする必要はない。しかし高地で冷涼なため、牧草の成育が良好とはいえない。そのため、農作物が家畜の飼料となっている。
  - 31) ユルク族の事例は、松原正毅の著作（松原 1983 同 1990）を参考にした。
  - 32) ユルク族の間では、家畜をマルと呼ぶ。このマルに含まれるのは、山羊、羊、牛、馬およびラクダの5畜に限定される。これに対して、タンディアオ家など雲南チベット族の場合、豚が家畜に数えられている。そのため、豚も他の家畜と同様に放牧される。その豚の飼料の一部としてジャガイモが用いられている。
  - 33) この点について、ネパール北西のトルボ地方のチベット族を調査した高山龍三の見解（高山 1960：25）を参考にした。高山龍三は、チベット族（チベット人と呼ぶ）を、農耕を行なう耕地と固定した住居を有し、数ヶ所の放牧地で家畜を放牧するタイプの農牧チベット人、テントで暮らして定住せず移動を繰り返して家畜を追って生活しているタイプの遊牧チベット人の2形態に分類した。

なお、前述した谷泰の牧畜業に関する分類を、上述の高山龍三の見解に加味すれば、雲南チベット族の牧畜業は、山腹にある放牧地を季節ごとに上下するので、移牧形式を取る農牧業であるといえよう。
  - 34) ヤクは春季に子供を生む。2007年度は多産で、オス9頭、メス4頭のヤクが生まれた。メスは搾乳するため、基本的には売却しない。
  - 35) 毛布1枚には7斤、坐布団1枚には5斤、マント1着には7斤のヤクの毛が必要である。当家では、女性がこれらの製品を織っている。なお、他の地域（香格里拉県格咱郷など）では、30斤余りのヤクの毛をその10倍すなわち300斤のチンクー麦と交換している。このように、毛および乳製品に関しても、販売しないで食糧と交換する場合もみられる。
  - 36) 松茸の採取は、近年日本向けに出荷するようになって以来のことである。しかし、2008年には中国産の食材に問題があることが判明したため、中国産の食材の販売が日本では大不振になった。その影響を受け、中国産の松茸はほとんど日本に出荷できなくなった。このように松茸は年度により変動がみられるので、安定した収入源とはいえない。

#### 引用・参考文献

青木文教（1969）：『西藏』芙蓉書房

- 江上波夫編 (1987) : 『中央アジア史』(世界各国史 16) 山川出版社
- 金丸良子 (1987) : 『中国山東民俗誌—伝統に生きる人々—』 古今書院
- 金丸良子 (2005) : 『中国少数民族ミャオ族の生業形態』 古今書院
- 金丸良子 (2008) : 「中国雲南省西北部における主要少数民族の住み分けモデル」  
『言語と文明』 6 3-24 頁
- 木内信蔵編 (1984) : 『世界地理 2 東アジア』 朝倉書店
- Grunfeld, A. T. (1987) : “The Making of Modern Tibet” Zed Books Ltd. 八巻佳  
子訳 (1994) : 『現代チベットの歩み』 東方書店
- 鈴木正崇・金丸良子 (1985) : 『西南中国の少数民族—貴州省苗族民俗誌—』 古今  
書院
- 高山龍三 (1960) : 「トルボ地域の農牧チベット人経済 (Torobo 民族誌—その 2)」  
『民族学研究』 24-3 23-59 頁
- 高山龍三 (1992) : 『環境・人間・文化』 八千代出版
- 谷 泰 (1976) : 『牧夫フランチェスコの一日 イタリア中部山村生活誌』 日本放  
送出版協会 (NHK ブックス)
- 田畑久夫・金丸良子 (1989) : 『中国雲貴高原の少数民族—ミャオ族・トン族—』  
白帝社
- 田畑久夫・金丸良子 (1995) : 『中国少数民族誌—雲貴高原のヤオ族—』 ゆまに書  
房
- 田畑久夫・金丸良子・新免康・松岡正子・索文清・C. ダニエルス (2001) : 『中国  
少数民族事典』 東京堂出版
- Davies, H. R. (1909) : “YÜN-NAN. The Link between India and the Yangtze”  
Cambridge Univ. Press. 田畑久夫・金丸良子編訳 (1989) : 『雲南—インド  
と揚子江流域の環—』 古今書院
- 国家民委民族問題五種叢書編輯委員会《中国少数民族》編写組 (1981) : 中国少数  
民族』 人民出版社
- 張承志 (1993) : 『回教から見た中国』 中央公論社 (中公新書)
- 《茶馬古道》編輯組編 (2003) : 『茶馬古道』 陝西師範大学出版社
- 月原敏博 (1990) : 「観光と交易の村における農耕と牧畜—ナムチェ村研究ノート  
から—」『ヒマラヤ学誌』 創刊号 85-112 頁
- 月原敏博 (1996) : 「雑種を生産する牦ヤク移牧群—ネパール・ソル地方の事例か  
ら—」 大阪市立大学地理学教室編 『アジアと大阪』 古今書院 254-570 頁
- 星川清親 (1998) : 『改訂増補 栽培植物の起原と伝播』 二宮書店
- 松原正毅 (1983) : 『遊牧の世界 上・下』 中央公論社 (中公新書) 同複製  
(1998) : 『遊牧の世界 トルコ系遊牧民ユルックの民族誌から』 中央公論社

(中公文庫)

松原正毅 (1990) : 『遊牧民の肖像』 角川選書

村松一弥 (1973) : 『中国の少数民族 その歴史と文化および現況』 毎日新聞社

《民族問題五種叢書》 雲南省編輯委員会編 (1983) : 『納西族社会歴史調査』 雲南民族出版社

雲南省中甸県志編纂委員会編 (1997) : 『中甸県志 (中華人民共和国地方志叢書)』 雲南民族出版社

雲南省迪慶藏族自治州地方志編纂委員会編 (2003) : 『迪慶藏族自治州志 上 (中華人民共和国地方志叢書)』 雲南民族出版社

人民中国編集委員会 (2006.7.5) : 『人民中国』(637.7 月 5 日号) 人民中国雜誌社

任美鏗主編 (1982) : 『中国自然地理綱要 (修正版)』 商務印書館 阿部治平・駒井

正一抄訳 (1986) : 『中国の自然地理』 東京大学出版会